【研究報告】

熱帯狩猟採集民社会における社会的存在としての犬：カメルーンのバカ・ピグミーにおける犬をめぐる社会関係とトレーニング

大石高典（東京外国語大学）

1. はじめに

熱帯狩猟採集民と犬の関係については、生業（狩猟活動の成功）への貢献に焦点を当てた研究がなされてきた（サンの犬猟：Ikeya 1994; ニカラグアの狩猟民の犬猟への最適採餌戦略の適用：Koster 2008; アカ・ピグミーの犬猟の民族考古学：Lupo 2011 など）。しかし、生業技術の側面以外の人と犬の関係についての知見はごく限られている。ここでは、カメルーン東南部の熱帯林地域に居住する狩猟採集民バカ・ピグミーと犬の関係について、近隣農耕民や地方都市住民との比較を行ないつつ、とくに社会的な側面に着目して報告する。

2. 調査地域の概要と方法

調査地は、報告者が 2002 年より継続的に生態人類学的な調査を行なっているカメルーン東部州ブンバ・ンゴコ県ドンゴ村を中心に、比較のために同じ東部中の地方都市であるヨカドゥマ市、ムルンドゥ市においても主に都市棲み農耕民を中心に短期間の調査をおこなった。調査期間は 2015 年 3 月、2016 年 9 月、2017 年 9 月の合計 4 週間である。

それぞれの調査地点で、犬を個体識別し、個別の犬の観察と所有者への聞き取りを行なった。犬は、人のいる場所で容易に見ることができ、野生化した犬の存在は確認できなかった（写真 1）。犬のトレーニングにもちいる薬については、使用法の聞き取りとともに、植物採集と同定を行なった。植物種の同定は、カメルーン国立ハーバリウムのチエンゲ博士に依頼した。聞き取りは、41 人のバカ・ピグミー成人（男性 39 名、女性 2 名）と 14 名の農耕民、都市住民に 104 個体（♂61 個体、♀41 個体、性別不明 2 個体）の犬について、犬の名付け、入手方法、用途、性格、給餌について尋ねた。死亡個体については、死因も尋ねた。

写真 1　犬のいる食事風景。アブラヤシの油をかけたイモが時折分配されていた。

3. 結果

（1）バカ社会における犬の位置

バカ社会における犬の所有ははっきりしている。ほとんどの狩猟に犬が参与するが、そこでの犬の利用は所有者に限定されない。銃のように、犬を狩猟具として農耕民から借りる事例は見られなかった。犬の所有は、そのほとんどが男性による。犬の名付けには、バカ語、バクウェレ語（近隣農耕民の言語）、フランス語がもちいられる。有名人の名を除いて人名との重複はない。「ブレック」などごく少数の名前が複数見られたほかは、それぞれの犬に出来事や逸話に基づいた名前が付けられていた。

犬の入手方法を見ると、76%（70 事例中 53）が姻族と他集落からの訪問者からの贈与であるのに対し、バカ・ピグミー以外では金銭による購入が目立った（28 事例中 12, 43%）。バカ・ピグミーの間では、犬の売買事例はほとんど見られなかった。

犬の死因（31 事例）は、多い順に人による殺害、病気、野生動物からの被傷、ヘビによる咬傷、跳ね罠による事故などであった。バカ・ピグミーによっ

て犬が食されることはないが、農耕民の中には積極的に食用とする人々もいる。犬が死ぬと、特別な場合を除き埋葬されることはなく森林の中に放置される。

（2）トレーニングによる犬の社会化

ハンターは、犬を放し、獲物を追わせて槍で仕留める犬猟のほか、銃猟、跳ね罠猟などに犬を連れて行き、犬に獲物の一部を分配する。内臓のほか、特定部位の肉を与えるハンターもいる。肉を与える際には、調理し、犬の薬（ma mbolo）と混ぜて食べさせる。

犬の薬は、犬を狩猟の際に攻撃的にしたり、特定の動物を追わせたり、食べ物を盗まないようにさせるなど、犬の行動をコントロールするためにもちいられる。18 名のバカ・ピグミーのハンターに使っている犬の薬を挙げてもらったところ、57 方名種（既同定：木本 28 種、草本 4 種、シダ 2 種、コケ 1 種）の植物と動物 1 種（オオヤスデ）に上った。

ハンター一人あたりが挙げた犬の薬は平均 5.5 種（range: 0-21, SD: 5.19）であり、犬の薬の知識には著しい個人差が見られた。個人間で共有されている知識は、バンボケ（*Diospyros* sp.　カキノキ科）など数種類の植物・部位に限定され、重複が少ない。

犬の薬の処方には、食事とともに与えるほかに、点鼻（mufongo）したり、剃刀で作った傷口に灰をすり込むなどの方法で行なわれる（写真 2）。犬は、人を対象とした民族医学（佐藤 2001）と同様、薬の有する特徴を施術された個体が同化することで、人が望む方向に行動が変化すると考えられている。

写真 2　犬の薬を点鼻する（mufongo）

4. 考察

バカ・ピグミーの社会における犬の社会的位置づけには、二重基準が存在する。すなわち、森では狩猟の伴侶として人並みに扱われるが、集落では潜在的な飯泥棒として暴力的制裁を加えられることが多い。報告者はこの二重基準の理由について、定住化・農耕化したバカ・ピグミー社会にとって、犬は森での生業（狩猟）に貢献するが、定住集落では家畜としての維持にコストがかかるからではないかと考察した。

一方で犬は社会関係を媒介する役割も担っている。犬は、婚姻・訪問などの社会関係を通じてバカ・ピグミーの集団間を移動する。そして、犬の発達過程では、ハンターごとに経験的に獲得された知識に基づく「犬の薬」をもちいたトレーニングが施されることで、集落と森それぞれの文脈に応じた社会化が意図される。

5. 今後の課題

今回報告した内容は、主に犬の所有者への聞き取りと、人から犬への働きかけの観察に基づくものであった。人と犬の相互作用を解明するには、これに加えて、犬が人にどのように応答しているのかを丁寧に見ていく必要がある。行動学的な手法を参照しながら、フィールドでの観察を継続していきたいと考えている。

文献

Ikeya, K. (1994) Hunting with dogs among the San in the central Kalahari. *African Study Monographs* 15(3): 119-134.

Koster, J.M. (2008) Hunting with dogs in Nicaragua: an optimal foraging approach. *Current Anthropology* 49(5), 935-944.

Rupo, K.D. (2011) A dog is for hunting. Albarella, U., Trentacoste, A.　eds.

Ethnozooarchaeology: The Present and Past of Human-Animal Relationships. Oxbow Press, Oxford, pp.4-12.

佐藤弘明（2001）「森と病―バカ・ピグミーの民俗医学」市川光雄・佐藤弘明（編）『森と人の共存世界』京都大学学術出版会, pp. 187-222.